ラスト・ワルツ

盛田隆二

新潮社

ラスト・ワルツ

盛田隆二

新潮社

ラスト・ワルツ

著者◉盛田隆二（もりたりゅうじ）

発行　一九九三年三月二〇日
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162　東京都新宿区矢来町七一
電話　〔営業部(03)三二六六—五一一一
編集部(03)三二六六—五四一一〕
振替　東京四—八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

© Ryuji Morita 1993, Printed in Japan

ISBN4-10-391301-0　C0093

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ラスト・ワルツ

装画＊杉山　邦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ねえきみ、ぼくは何の答えも受け取っていない。
ただ古い質問の山が残っているだけ……。

Neil Young

第一章　1985年

1

妻と二歳になる娘はひとつのベッドで眠っている。

午前二時半、ぼくはいま帰ってきたばかりだ。

ひどく疲れている。そして混乱している。とても眠れそうにない。グラスにウィスキーをそそぎ、台所のテーブルにむかう。ウィスキーをひと口飲み、目を閉じる。

新宿のバーで花菜子(かなこ)さんと会った。十二年ぶりの再会だった。目の縁が熱くなり、しばらく声も出なかった。高揚、逡巡、気後れ、そしていらだたしいほどの虚脱感。言葉ではとてもいいあらわせない。長いこと離れて暮らしていた母と子が夜の新宿で偶然再会したみたいだった。

先に気づいたのはぼくのほうだった。花菜子さんは若い男とふたりでいた。ぼくはカウンターの隅の席から、ふたりをじっとみつめた。男はどう見ても二十代の前半にしか見えない。ぼくは大きく息を吸いこみ、ゆっくりと吐きだした。そしてあれから十二年もたつのだと思った。

「十二年」と口に出していってみた。

それだけたてば、時代も変わるし、人も変わる。十八だったぼくも今年で三十になる。二十八だった花菜子さんは四十だ。そう、信じられないことだが彼女は四十になる。

色白の小さい顔、色素の薄い瞳、額の中央で左右に分けたストレートの長い髪、それらは十二年前と変わっていない。だが目のまわりや額や首筋には、十二年という年月の長さが無残なほどはっきりと刻まれている。

男がズブロッカのソーダ割を注文した。なんでそんな糞みたいなものを飲むんだ、ぼくは俄かに腹が立った。男がなにか冗談をいい、花菜子さんが顔をのけぞらせて笑った。白い喉が見えた。

やわらかそうなサーモンピンクのジャケット、短めのプリーツスカート。とても清潔で、しかも華やいでいる。だが十二年前の彼女はけっしてそんな恰好をしなかった。

花菜子さんがゆっくりとこちらに顔をむけた。そしてなにか不思議なものでも見るようにぼんやりとぼくを見た。ぼくは笑いかけようとして失敗した。花菜子さんは首をふり、若い男の耳もとでひとことふたことささやいた。男は少し怒ったような顔になり、ズブロッカのソーダ割を飲み干すとバーを出ていった。

花菜子さんがゆっくりと近づいてきた。

「ひさしぶり」と彼女はいった。

「ひさしぶり」とぼくもいった。

それ以上言葉が出てこなかった。彼女はじっとぼくの顔を見ていた。ぼくは黙ってウィスキーグラスをみつめていた。

「歩こうか」と花菜子さんがいった。

ぼくはうなずくと立ちあがった。

四月に入ったばかりだった。新宿の夜はまだ少し肌寒かった。花菜子さんはときおり立ちどまり、深呼吸をしてまた歩きはじめた。ぼくは花菜子さんの手を取ることも、腕を組むこともできなかった。

十二年前のことを話したかった。だがそれはすでに物語のように遠かった。すべてが十二年前に見た夢のなかのできごとのように思われた。ぼくらは押し黙ったまま歩きつづけ

た。小さな公園に入り、ベンチに腰かけた。
薄い雲が月の上をゆっくりと流れていった。
「なにしてるの、いま」花菜子さんがいった。
「情報誌の編集」とぼくはこたえた。
「そう、あなたがね」花菜子さんは何度もうなずいた。
「ぼくのような田舎者がね」とぼくはいった。「でも東京に出てきてもう十二年になる」
「大きくなったよね」
「花菜子さんは変わらない」
「お世辞までいえるようになって」
ぼくはむかいのビルを見上げた。紫色のネオンサインがホテルの名と宿泊料金を交互に表示している。ぼくは花菜子さんの手を取り、立ちあがった。花菜子さんはぼくの腰に手をまわし、大きく息をついた。

ぼくは空になったウィスキーグラスをくるくるまわしながら、花菜子さんと暮らした十二年前に思いを馳せている。
それは二週間にも満たない日々だ。だがけっして忘れられない。彼女が首に犬の首輪を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

つけて帰ってきた夜。金属の鋲をぐるりと打ちこんだ、硬いごわごわした革製のあの犬の首輪。できることなら外してくれないか、ぼくは懇願したが、十歳上の彼女はきっぱりとその申し出を退けた。これくらいのことでくよくよしないほうがいいと思うわ、彼女はそういった。

グラスにウィスキーをそそぐ。記憶の暗がりに沈みこんでいた十二年前の日々がよみがえる。それらの日々が次々と、信じられぬほどはっきりとよみがえってくる。涙があふれてとまらない。彼女の首は首輪の縁に沿って次第に腫れあがってきた。痛みに耐えることがそんなに大切なの、ぼくは訊いた。ずっとあとになってあなたのことを思いだすときにね、彼女は笑ってこたえた。首輪のこともいっしょに思いだしてなつかしむことになるのよ。

ぼくはテーブルに片肘をつき、ウィスキーを飲みつづける。いくらつぎたしてもグラスはすぐに空になる。となりの部屋から妻と娘の規則正しい寝息が聞こえる。いつのまにか窓の外が明るくなっている。ぼくは服を脱ぎ、ベッドにもぐりこむ。

妻が寝返りをうち、こちらに顔をむけた。どんな表情をしているのかよくわからない。

「遅くなった」ぼくは小声でいい、目を閉じる。

だが眠りがなかなか固まらない。目のなかの闇に花菜子さんの白い身体が浮かびあがる。

十二年ぶりに再会した男と女が服を脱ぐのももどかしく、ホテルの一室で抱きあう。女の身体は十二年前にくらべ、やわらかくそして温かい。少し痩せたのだろうか、腕のなかにすっぽりとおさまる。震える手で相手の服を脱がせ、ベッドに倒れこむ。押し黙ったまま、たがいの身体を叩き、ひっぱり、こすり、噛む。言葉をかわす余裕はない。下腹が触れあうたびに汗がぴちゃぴちゃと音を立てる。だが腰を動かしながら、髪をかきむしりながら、やがていいようのない虚脱感に打ちのめされる。

「あなたが物欲しそうな顔をしてたからよ」花菜子さんはベッドのなかでそういった。

「そういう意味で訊いたんじゃないんだ。気づいたらこうなっていた」

「わたしだってそうよ」

「よくわからない」

「どういってほしいの」

「ぼくはもう十八じゃない」

「わたしなんかもうおばあちゃんよ」

「ちがうんだ。ぼくはもうセックスをしたくてたまらないという年じゃない」

「当然でしょ」

「そんなにぼくは物欲しそうな顔をしてました」

「わたしは今夜、十二年前のあなたに抱かれた。あなたは十二年前のわたしを抱いた。ちがう、たぶんそうじゃない。わたしは十二年前のわたしを抱いた。あなたは十二年前のあなたを抱いた。そういうこと。それだけの話。それで終わり。ふたりはもう二度と会うべきじゃない。わたしにいってほしいのはそういうことでしょ。でもなぜこんなこと、わざわざ口にしなけりゃならないのよ」

娘の泣き声が聞こえ、妻の起きあがる気配がした。

「もう二度と会わない」ぼくは遠ざかっていく意識をつなぎとめるようにつぶやくと、眠りの斜面をすべっていった。

もう二度と会わない、もう二度と会わない、口のなかで呪文のように唱えながら、ぼくは薄暮れの街を歩きまわっている。もう、二度と、会わない。いったいなんのことだ。ぼくは足をとめた。

腕を深く折り曲げ、腕時計をのぞきこんだ。縦一直線にのびた二本の針。午後六時。この時刻にぼくが突っ立っているこの場所はいったいどこなのか。やわらかな夕日がビルや街路樹の輪郭を金色に縁どっている。ふと自分がいなくなったような気がして鼻に人差し指をあててみた。西の空には黒い厚紙でできた高層ビルが何本も立っている。

頭をふり、歩きだす。足を踏みだすたびに風景が下へ下へと沈んでいく。耳の後ろで羽音が聞こえ、ふりかえると一匹の蚊と目があった。蚊は墜落しそうになりながらも必死についてくる。季節が早すぎるのだ。小さな虫が哀れだった。ポケットのなかをさぐるとクッキーが入っていた。手のひらで割ってやると、蚊は急降下してきてクッキーの粉を舐めた。道が少しずつ細くなっていく。道の両側には古い屋敷が建ち並んでいる。

小さな酒場が並ぶ、そこだけが奇妙に明るい一角に出た。だが三軒目の店先で足がすくんでしまった。戸口の横の暗がりにひとりの女がうずくまっていた。女は肉の色が透けて見える薄紅色のドレスを着ている。顔は髪に隠れて見えない。華奢な背中と豊かな腰の不釣合いが性欲をそそる。もう若くはない。泣いているんだろう、背骨がきしきしと鳴っている。ぼくはその横を通り抜けられずにいた。上から女の様子を見守っているうちに、少しずつ残酷な気分になってきた。靴の爪先で女の脇腹をつついてみた。

「あらあなた」女の手がのびてきて、足首をつかまれた。

ぼくはとっさに舌を巻き上げ、叫び声を飲みこんだ。

「おれのこと、知っているのか」

女はかすかにうなずいた。女とは一度どこかで会ったことがあるような気がする。

「お茶くらい飲んでいきなさいよ」

「そうだな」
女の手からすっと力が抜けた。ぼくは女について店に入っていく。
店のなかはひどく暗く、そして狭い。裸電球がニスの剝げ落ちた卓袱台と二枚の座布団を照らしだしている。
「あなた、ちょっと座っててよ」
襖のむこうから女の声が聞こえる。
「気を使わないで、すぐに帰るから」
「なによ、水臭い」
「ここは酒場じゃないのか」
返事はない。ぼくはドアを開け、外に飛びだした。裏路地はさらに細くなっている。少し急ぐ姿勢になった。
夜になっている。道は砂地に変わっている。海が近いのだろうか。靴のなかに砂が入りこみ、ひどく歩きづらい。雲が物凄い速さで流れている。鼻血を止めようとするときのように上をむいて歩いた。花菜子さんに似ていたな。そう思った途端、女の顔は思いだせなくなった。潮の匂いが鼻孔に流れこんだ。
砂の広場では若い男女が乾燥物狩りをしていた。指先を熊手のように内側に折り曲げひ

っかくと、乾いて白くなったキノコやネズミが月の光に照らされて出てくる。キノコをひと口食べてみた。塩っぱくてうまい。乾燥ネズミは食べる気になれない。金の払い方がわからずためらっていたが、注意して見ると乾燥物はひとつひとつビニール袋に入っている。食後にビニール袋の枚数で精算する仕組みになっているらしい。

首筋にひんやりするものがあてられた。あの女だ。女がぼくの背後でじっと息を殺している。ふりむいてその顔を見たら最後、取り返しのつかないことになってしまう、そう思い、そのときこれが夢であることに気づいた。夢であるならば女の顔を確認しておくべきだろう、そう考え、ふりむこうとしたとき、目の縁にノコギリの刃が見えた。刃は青白い光を放っている。思わず目を閉じた。力まかせにノコギリが引かれた。それはカーテンを引く音に似ていた。

「せっかくの日曜日よ」妻の声が聞こえる。

シーツの冷たい部分をさがして寝返りをうち、あきらめてベッドから下りた。

便所から戻ると、妻はぼくがそれまで寝ていたベッドにあおむけになっていた。片手で笑った顔を隠し、もう一方の手で前掛けより短いスカートのすそをひっぱっている。

夢のつづきを見るようだった。

冷蔵庫からビールを取りだし、台所のテーブルに置く。低い椅子に腰を落とすと、あお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c